

鹿子原
平文 一八二一—一九〇一
寛政九(一八四九)刊(四六七)

鹿子原

9月号

— 近 詠 —

夢の客
丸山佳子

水は色かへて渦巻く走り梅雨

夏休み大人の声になりきつて

贅沢な匂ひを放ち水打たる

いつまでも聖女でをれぬ柿の花





この方のお話聞こう
茄子の花
マネキンの草色服にひと目惚れ
赤とんぼ柱の花として見上ぐ
新しい出合ひはじまる木の实坂
梅雨の夜に来てすぐ帰る夢の客
必要な刺もあります
盆の寺



豊 田 都 峰

清響集 その六十五

ありあまる薫風の碑は聖堂址
右近祈る天響のごと風かをる
薫風を敷きつめ右近の城址とす
句碑かづく青葉の万の雨しづく
句碑もまたあぢさゐにじみの山の雨
あぢさゐのしづくは水子仏のこゑ



水子仏あやしごころにあぢさゐは
丘の上の一本の草雲の峰
日盛や点をおくとも点とならず
毛虫とて這はん山河襟帯に
葛切や些事ばかりなるひと日とて
紅蜀葵きりきり飛ばしてをりしかな
信州の空ごととどく青りんご
花莫蔭の先は溪川風どころ

「俳句四季九月号」七句出稿

秀華採集

白南風に乗つて海幸彦戻る

木戸渥子

山幸に負けたことになっている海幸だが、戻るにはふさわしい白南風である。この場合はそのような神話的な背景よりは、白南風のさわやかさの一つの具象としての表現と味わう。

武者人形目尻の紅に鋭気あり

奥田筆子

梅雨深し草の匂ひの灯をともす

佐久間多佳子

前者の焦点的な描写、後者の感覚的な描写、いずれも具象として表現されているのがよい。

鈴鹿 仁

大文字

滴りの一音づつの風清し
円相の山は西向く大文字
原爆の日の焼するめ反りすぎる
墓洗ふ祖の名いかめし陽よ風よ
てんとうむし童話の森の夢語り
人の世の利口さ加減青すだれ
京にゐて着倒れもよし縞縮

近 詠

宇都宮滴水

河童忌

晩秋の指それぞれに重さ持つ
河童忌や馴染の水となり淀む
立秋や低きものより濡れはじめ
遠方に友あり秋を連れ尋める
役終るむつつり案山子の宙深し
蚊喰鳥こころ変りは常のこと
その他てふ気安さにあり柿の村

神麓集



角 直指

文教の地に住み古りてばら咲かす
繚乱のばら園をわが城となす
教育は日本の宝薔薇咲く
燃ゆるものいつまでも欲しばら百花
王者たる風格のばら剪り惜しむ

彌 瓶史

朴散華煩惱一つづゝ潤れる
郭公に搾乳終へし牛放つ
梅雨夕日引きくにびきの帰漁船
藻を掛絡かちに南無三髭の梅雨鯨
さくらんぼ右顧左眊して塾嫌ひ

船 越 美喜

傘ごしに声かけられる濃あぢさゐ
これよりは坂となる道えごの花
俳枕 六月の水匂ひけり
死なば自由生きて束縛夏落葉
あともどり出来ぬ現し世青楓

奥村 鷹尾

老農の病みて水張田作務案じ
荒れし田の世嗣もあらで雨季迫し
青鷺の来て休田の甦る
陪冢の陵守蟬の鳴き歌まじ
夏草の宮址守る三世菓舗店主

丹 生をだまき

若夏や足長乙女に追ひ越さる
囀りを浴びて今日てふ日が始まる
おのが声に酔うて老鶯あまたたび
忘れじの滅びの美学敦盛草
蚊柱の立つたそがれの庭湿り

桑名・本曾川・湯の山峠行 山田をがたま

伊勢臨む渡しに通ふ若葉風
新樹光水の桑名に蟠竜居て
木曾三川の空筒抜けて首夏の風
葦育つ河原に翔びたつもの育つ
いくつもの小滝育てる若葉溪

神麓集



岩崎 憲二
 苔の花思はず避ける試歩の杖
 明日の為咲かねばならぬ苔の花
 苔の花明日退院の試歩の目に
 飛機の旅歩ける様な雲の海
 見せる丈「こんな黒鯛」釣り自慢

奥村 鷹尾

散り残る実や葉があれば芽が兆す
 斯る小さき庭に著我咲く分相応
 白山吹清楚品趣は自ら
 冬田草刈る間もあらで子の涙
 苔荒らす疎まし恋猫顔馴染

栗の花 柴田 朱美
 風の息うかがふやうに栗の花
 直系をはみだしている栗の花
 花栗や怒涛はいつも空にあり
 栗の花麻薬のやうにささやか
 係はりの妖しくなりぬ栗の花

紫陽花 荻野 千枝
 紫陽花の七彩がくれ何の翅
 紫陽花や言ふこと昨夜と何故違ふ
 紫陽花や句座の心音意識して
 紫陽花や女ごころに似ている
 彩秘めて山ふところの山紫陽花

黒鯛釣 高木 智

少年の竿に当りし黒鯛の引き
 ちぬ釣りの堤防尻に快し
 ちぬを釣る足下の海に吸ひ込まれ
 黒鯛のアタリ初めけり夕まづめ
 深更の空に鈴鳴り黒鯛釣

服部 郁史
 黄楊の花風が持ち来る午後の鬱
 父死後の兄弟の距離柳絮とぶ
 娘の一年祖母の一年青嵐
 武具飾る怒らぬ男の強さかな
 武具飾る弟と見る兄の眼よ



京鹿子集

豊田都峰選

京都 木戸 渥子

白南風に乗つて海幸彦戻る
誰そ彼はしだれ葉桜ゆれどほし
万緑や木の名花の名をみなの名
虎が雨肘鉄砲の弾さがす
めんだうな解約届蠅たたき
武者人形目尻の紅に鋭氣あり
会見の首相のうしろ武者人形
硝子工五月の海をふくらます
ひちりきの遅れがちなる竹の秋
玉葱の肩に雨降る女人塚
木下闇人こゑふつと消えにけり

久世 佐久間多佳子

奥田 筆子

梅雨深し草の匂ひの灯をともす
青梅雨の茫茫人を遠くせる
塚一つ残し田植の終りけり
日暮くる河鹿のこゑを頃にして
青嵐車椅子重し力瘤
新緑や富士南麓に戦車轍
青田風親子三代恙無し
茅葺きの軒に菖蒲や孫二人
緑蔭やたこ焼きうまし爪楊枝
少子化の小学校の鯉幟
大志抱けとて泰山木の花開く

所沢 牧野 麦芽

千葉 河内 桜人